

〔トークルーム〕

## バイリンガル教育の試み ——海外で日本語を継承させること——

武 山 恵 奈

私は今、ベルギー人の夫、まもなく4歳になる息子と共にベルギーで暮らしています。出身地が岐阜県高山市であることから、山大在籍中はしきりと、「そんな遠いところからどうしてここまで？」と不思議がられたものですが、山口-高山間とは比べものにならないほど遥か遠くに来てしまったこととなります。滞在年数11年、山口で過ごした6年間を優に超えてしまいました。

ここに来た頃は、とにかく言葉（オランダ語）を覚えなければ、と焦ることが多かったのですが、最近ではむしろ、自分の母語である日本語を大事にすることを考えるようになりました。外国にいるわけですから、もちろんある程度の外国語能力は必要です。しかし、長く海外に暮らしてみても、母語である日本語もまた、使わなければ忘れてしまうこと、錆付いてしまうことを切実に感じています。私は仕事で日本語を教えています、我が子に対して日本語で接することに決めてからは一層、母語の重要性を意識するようになりました。

現在の時点では、息子はそれほど苦にする様子もなく二言語（オランダ語と日本語）の使い分けを行っています。私は限られた日本語環境の中で息子が、どのように日本語を習得していくのか、という点に非常に興味を抱いてきました。3歳を過ぎてからは、ブラッセル日本人幼稚園で行われている「水曜クラブ」（週1回）や、親が交替で先生役を勤める「ぷちぼん」（隔週土曜日）などに参加、外部との接触も増えましたが、それまでは一時帰国期間を除き、家庭がほぼ唯一の日本語環境であったと言えます。ここではこの、最初の3年間において試みた「我が家におけるバイリンガル教育」について報告したいと思います。

### 1. 事前に話し合ったこと

まず、子供が誕生する前から、夫婦で幾度も話し合ったのは、次のような点についてです。

#### ① 子供に何語で接するか。

子供に対してはそれぞれの母語（オランダ語、日本語）を用いるということで最初から同意していたのですが、夫婦間の言語をどうするか、ということについてはなかなか結論が出ませんでした。というのも、それまで私たちは、どちらの母語でもない、英語で会話していたからです。それぞれの母語+英語、という3カ国語が飛び交う状態になってしまうと、子供も、また私達も混乱するのではないかと、という不安がありました。しかし、母親にオランダ語で話しかけたり、父親に日本語で話しかけたりすることを防ぐためには、むしろ英語を残しておいたほうがよいのではないかと結論に至り、現状維持ということで落ち着きました。

(2)

② 第三者が加わったとき、子供に対しての使用言語を変えるかどうか。

これは、オランダ語しか理解できない相手が会話に加わったときだけ例外的に、子供に日本語で話しかけるのをやめて、オランダ語のみの会話に切り替えるかどうか、ということです。私達はどのような場面であっても、子供に対しては母語でのみ話しかけることにしました。

③ 子供が異なる言語で返答してきた／話しかけてきた場合にはどうするか。

応じない、ということで同意しました。ただし、無視を決め込むのではなく、「何で言ったの？それって～(日本語)ってこと？」といった具合に、こちら側からヒントを与える必要があるだろうと話し合いました。

④ 両親を何と呼ぶせるか。

どちらの言語でも通じる「パパ」「ママ」で統一することにしました。私自身は両親を「お父さん」「お母さん」と呼んできたので、本当はこちらのほうがよかったです、結局断念しました。

## 2. 言葉の成長の様子ーその実際

では、実際どのように発達していったか、ということですが、以下は、日々の記録を簡単にまとめたものです(便宜上4つに分けました)。なお、言語環境について触れておくと、生後4ヶ月までは日本語中心(母親と1対1)、4ヶ月以降はオランダ語中心(保育園)になりました。

① 1歳9ヶ月までにできるようになったこと (～2006年6月)

意味のある言葉を発することができるようになるが、日本語・オランダ語共にほとんど単語のみ。基本的に、1つの物につき1通りの言い方しかできない。例外は「木」と「バイバイ」であるが、日本語かオランダ語の、いずれかの発音に難あり。

しかし、発話レベルではオランダ語でしか言えないものでも、日本語を知らないというわけではない。たとえば、「おしゃぶり」は、オランダ語(幼児語)の「トゥトゥー」しか言えないが、日本で「おしゃぶりはどこ？」と言われれば、指し示すことができる。なお、生後10ヶ月に約4週間、日本に一時帰国したが、表立った変化は認められなかった。

下記の表は、当時の(家庭における)語彙をまとめたものである。

オランダ語	日本語
papa,mama	／ パパ、ママ
dada (=バイバイ)	バイバイ[baibai] *不明瞭
hallo (=こんにちは)	—
O,oh- (TV 『テレタビース』の影響、何か困ったことが起きたときなどに使う)	—
dat (=あれ)	—
Po (TV 『テレタビース』の登場人物) Tinky (同上: 正しくはTinky-Winky)	

(3)

tutu (おしゃぶり)	－
boom (木) [ただしbomと発音]	木[ki]
auto (車)	－ *ただし「ブプパー」とは言う
koe (牛)	－
－	葉っぱ [happa]
－	花 [hana]
－	桃 [momo]
－	布 [nuno] *アクセント逆
－	紺 [kon]
－	象 [zoo]
－	犀 [sai]
－	パン [pan]
－	バス [basu]
－	スプーン [supuun]
－	やかん [yakan]
mama,thuis (ママ、おうち)	－
－	あった。
－	あれ？
Waf-waf (犬の鳴き声)	－
－	ニャンニャン (ネコ)
－	モー(牛の鳴き声)
－	メエー(羊の鳴き声)

## ② 1歳10ヶ月～2歳2ヶ月まで (2006年7月～12月)

- ・ この時期までに、日本語、オランダ語共に単語を2つ並べるようになった。

(例) 「バイキンマン、ねんね」

- ・ 言語の使い分けが認められる。

(例) 「こわい。トトロ」 →父親には「bang.bang.totoro (こわい。こわい。トトロ)」

- ・ 指示語の出現 (これ、あれ、ここ)
- ・ 親しい人の名前が言えるようになる。

この間、日本に一時帰国(1歳10ヶ月)。語彙が増え、長いことオランダ語でしか言おうとしなかった言葉も、日本語で言えるようになった。一方、日本でも、「Neel(いやだ)」「nog(まだ)」「auto(車)」などはオランダ語のまま残った。わざわざ日本語で聞き返さなくても意味が推測できることから、周囲がそのまま受け入れ訂正しなかったことが原因ではないと思われる。

## ③ 2歳3ヶ月～2歳8ヶ月まで (2007年1月～5月)

- ・ 文が作れるようになる(3語以上つなげることができるが、助詞は抜ける)

(例) 「今日はレアちゃん(保育園に)来た」「電車、全然来ない」

(4)

- ・ 複文の出現 (「～てから」「～たら」など)
- ・ 助詞「と」(ママとパパ)、「だけ」(○○君(=息子の名前)だけ食べる)

上記以外には、「～たい」「～でしょう」「～と思う」なども使えるようになった。その他、よく現れるようになったものとしては、終助詞の「よ」(さむいよ)、肯定文における「～のだ」(こっち行ったの)、などが挙げられる。

4月にイギリスに行き、数日間イギリス人の友人宅に滞在したが、突然の言語環境の変化に驚いたのか、友人宅に到着してしばらくの間は日本語・オランダ語、どちらの言語で話しかけても返答せず、意味不明の言葉話し始めるといった反応が現れた。半時間もすると日本語は出てきたが、イギリス滞在中、オランダ語はほとんど出て来ず、父親にも日本語で話しかけるといった混乱が見られた。なお、この時期に繰り返し現れた誤用として、以下のものが挙げられる。

- ・ 「ママ、遊ぶ」(=遊んで)「ママ、電気つける」(=つけて)
- ・ 「ちがう」: 「～じゃない」の代わりに使う。「赤ちゃん、ちがう」(=「赤ちゃんじゃない」)
- ・ 後半「て形」が見られるようになるが、活用は必ずしも正しくない。「とりて」(「とって」と言いたい)
- ・ 「～ちゃった」がうまく言えない:「落ちちゃっちゃった」
- ・ 「たべもの」「のみもの」→「たべのも」「のみのも」

#### ④ 2歳9ヶ月～3歳 (2007年6月～9月)

2歳10ヶ月に、日本に一時帰国。帰国前からすでに文のまとまりがでてきたが、帰国後は助詞が入るようになり、「青い服を着たお兄ちゃん」などの、連体修飾もうまく作れるようになった。話を切り出す「あのね」、文をつなげるための「だから」や「それで」、忘れたことを確認するときの「～だっけ?」(何だっけ?)などが加わり、より会話らしくなった。

この時期に繰り返し現れた誤用は、

- ・ 「いてなかった」(方言ではOK):「今日、ミリアムちゃん(は保育園に) いてなかった」(=いなかった)
- ・ (おもちゃの車の下敷きになった人形を指して)「赤ちゃん、死んでる」(=死んだ)
- ・ 「まだ」と「もう」を間違える
- ・ 「かみなり」と言えない。「かまらり」と言う。

以上が我が家における「日本語教育」の「初期」報告です。

### 3. 実践後に感じたこと

一般に、バイリンガルの子供の場合、言語の発達はモノリンガルに比べて少し遅れることが多いと言われています。息子の日本語に関して言えば、日本で育つ子供たちに比べると、若干遅れているかもしれませんが、しかし、成人の日本語学習者と同じような誤用も認められ、自分なりに日本語を体系付けようとしている様子が見え始めました。3歳を過ぎると、オランダ語-日本語の(確かな)相互作用も認められるようになります。たとえば、オランダ語で「ik(私、僕)」と言えるようになったのはほぼ同時期に、日本語でも「僕」が出てくるようになりました。

さらに、4歳までには、両言語の違いを意識するようになり、「オランダ語で何ていうの?」「日本語では?」というような質問が出てくるようになります。

夫婦で事前に話し合ったことの①～④を実践してみて、やりにくかったのはまず、②の「第三者がいても、子供に対しての使用言語を変えない」ということです。特に、生後すぐは子供からの反応が得られないため、日本語を話すのは周囲の中で私1人、ということが多く、肩身の狭い思いをしました。日本語が理解できない人の前で、日本語を使用することは、思いやりに欠ける行為のように思えたからです。一方、周囲も、慣れるまでには少し時間がかかったのではないかと思います。義理の両親は、私が息子に日本語を継承させようとしていることについて全面的に支持してくれていますが、今でも会話中、日本語が入ると、「今何て言ったの?」と聞かれることが少なくありません。ですから、「使用言語を変えない」としても、周囲への配慮、つまり「今、私こう言ったのよ」「息子は日本語でこんなこと言ったのよ」とフォローすることは大切なのではないかと感じています。最初は正直面倒でしたが、軌道に乗ってくると、負担には思わなくなりました。

③の「子供が異なる言語で返答してきた場合は応じない」というのは、しばしばやりきれない気分になりました。本当は子供の言っていることがわかったときでも、それがオランダ語だというだけで、「何?今何て言ったの?それはいやだってこと?」などと聞くのは、あまりいい気分ではありませんでした。日本語になかなか切り替わらなかった単語の中に「Neel (いやだ)」がありますが、これを訂正するのはつらかったことを覚えています。というのも、「いやだ」というようなときは、子供が機嫌の悪いときが多いからです。けれども、親がオランダ語を容認すると、オランダ語でしか話さなくなるということを度々聞き、実際にそのような例を幾つも見てきたので、ここは正念場だと思い、何とか耐えました。

上記①～④の他に、私が意識して行ったこととしては、⑤添い寝（寝付くまで話しかけたり、日本語の歌を歌ったりする）、⑥本の読み聞かせ、⑦積極的な話しかけ、⑧日本語のCD、DVDの利用、⑨日本語の幼児雑誌の定期購読（1歳11ヶ月から）、などが挙げられます。添い寝は、1時間以上に及ぶこともあり、仕事が残っているときなどは、負担に思われることもありました。昼間一緒にいられない分、夜ぐらいは日本語の時間を作りたいと思ってそうなのですが、息子はすっかり添い寝してもらうことが当たり前になってしまい、たまに義理の両親に息子を預かってもらうようなときには、迷惑をかけることになりました（ヨーロッパには添い寝の習慣はないようです）。しかし、幼稚園に入った今でも、オランダ語の歌に比べて日本語の歌のレパートリーのほうが圧倒的に多いのは、この添い寝が功を奏した結果ではないかと密かに思っています。

なお、積極的な話しかけ、というのは、とにかく話す、ということです。保育園のことを聞く、その日一緒にしたことを話す、物の名前をできるだけ言う（たとえば電車に乗ったときには景色を見ながら「～があるよ!」と話をする）というようなことです。

テレビについては賛否両論あるでしょうが、私以外に日本人のいない我が家では、日本語に接する機会を増やす目的で、積極的に利用しています。衛星放送はコストが高いため、ビデオやDVDが主流ですが、コンピューター（YouTubeや「おはなし絵本」など）も頻繁に利用しています。

#### 4. 今後の課題

今年（2008年）の夏、息子は日本で5週間に亘る保育園生活を体験しました。日本語の力は飛躍的に伸び、方言（飛騨弁）までマスターして帰ってきました。しかし、日本語を学ぶこと以上に貴重だったと思われるのは、泥んこ遊び、水遊び、虫との触れ合い、カエル取り、といった外遊びができたことです。暑さなどもとせず、裸足で外を駆け回る姿は、ベルギーの（室内活動中心の）幼稚園にいるときより、ずっと生き生きして見えました。息子がここで学び取った日本語は、息子が体で感じ取った言葉です。写真や絵からでなく、実際に触れ、感じながら覚える言葉。今回の一時帰国は、日本語にだけとられていた自分を反省する、いい機会にもなりました。

今後は、表記（ひらがな）をどう教えるか、ということが新たな課題になると思います。子供に日本語を教える義務のない我が家のような場合には、まず、ひらがなを教えるかどうか、ということから考えなければなりません。教えるなら、どこまで教えるのか、何歳で（あるいは何歳までに）教えるのか、どうやって教えるのか。これは、それぞれの親の考え方、家庭の事情によって異なると思います。ただし、6歳になったときに、日本人学校（土曜日の補習校）に入れるつもりかどうか、ということが一つの目安にはなるのではないかと思います。私自身は、息子の様子を見ながら最終決定を下したいと考えていますが、入学の可能性も考慮に入れて、これから2年間のうちに少しずつ、ひらがなを教えていきたいと思っています。

一方、私は自分自身のオランダ語の語彙をもっと増やす努力をしなければならぬと思います。今後、息子のオランダ語はどんどん上達するでしょう。しかし、オランダ語の語彙だけが増え、日本語の語彙力とあまりに差が開きすぎると、日本語への切り替えが困難になるはずで、現時点ですでに、言語の壁にぶちあたったときには「オランダ語では言えない」「日本語では言えない」と、すぐあきらめて、話題を変えてしまう傾向が見られます。こちらから日本語の語彙を与える、といった働きかけをしなければ、息子のほうも面倒になって、日本語で説明することを避けるようになるかもしれません。ですから、私自身がある程度まで、オランダ語から日本語に切り替えられるように、準備しておかなければならぬだろうと考えています。

「日本語を継承させようと思ったら、日本にいる親の10倍は努力しなくてはいけない」とは、数年前に参加した日本語教育セミナーで、講師の先生がおっしゃっていたことですが、挫折感や焦りを感じた時、よくこの言葉を思い出します。バイリンガル教育には「こうすれば必ず成功する」というマニュアルがあるわけではないので、試行錯誤しながら、それぞれの家庭に合ったやり方を見つけていくしかありません。理想としては、こちらの希望を一方向的に押し付けることなく、急がず焦らず、気を楽にして、共に歩いていくような気持ちでやっていきたいのですが、実際はなかなか思うようには進まないのが現状です。けれども、子供と母語で会話ができるというのは、本当に素晴らしいことです。また、子供にとっても、日本語ができれば世界は広がります。ベルギーは、言語事情が複雑で、いずれ息子はフランス語や英語も学ばなくてはなりません。しかし、ヨーロッパ言語以外の言語、特にアジアの言語ができる子供はまだ少数派です。日本語ができることが自信につながるよう、親のほうも全力で取り組みたいと思っています。

（たけやま・えな）